

発掘された中世の港湾集落

沖手遺跡（益田市）調査年：2004・2005（平成16・17）年

東山信治

沖手遺跡は益田川東岸で、河口から1.3 kmほど遡った平地に営まれた中世の集落遺跡です。地表面の標高は約1.8mで、大雨が降れば洪水に見舞われそうな低地に位置しています。発掘調査時は周辺に水田が広がっており、人家はありませんでした。こんなところに人が生活していたのだろうかという疑問に思っていました。実際に発掘調査を進めていくと驚くほどの密度で遺構が見つかりました。何時期もの建物が重なり合うように建てられたため一面柱穴だらけで、うっかりしていると落ちそうになりました。沖手遺跡は島根県埋蔵文化財調査センターのほか益田市教育委員会も発掘調査をおこなっており、全体で100棟以上の建物跡が確認されましたが、柱穴の数からすると本来はもっと多くの建物があったに違いありません。このほかに井戸が18基、墓が92基見つかりました。

この集落の特徴の一つは、溝状遺構や柵列で区画された方形の屋敷地が10以上並んでいすることで、計画性をもってつくられたことがうかがわれます。また、遺構密度の高い屋敷地がある一方で、遺構がほとんどない区域があり、広場だったと考えられます。

もう一つの特徴は、貿易陶磁や国内の遠隔地で作られた焼物が多数出土したことです。貿易陶磁は平安時代末頃から鎌倉時代初め頃ものが主で、白磁や青磁の碗・皿といった食器類が多数を占めますが、水注や茶入、天目茶碗など珍品といえるものもあります。また、完形品の中国産の白磁皿や青磁碗・皿が副葬された墓が2基見つかりました。このような墓は島根県内では数えるほどしか見つかっておらず、有力者が葬られたと考えられます。

それではこの沖手遺跡は一体どんな性格の集落だったのでしょうか。

遺構の配置や密度からみて、一般的な農村ではなく、計画的な地割にもとづいてつくられ

た「町」的な場であったと考えられます。また、貴重品も含む国内外の遠隔地で生産された品々を入手できる機会に恵まれていたことが出土遺物からわかります。こうしたことから、沖手遺跡は様々な人々やモノが行き交う流通センターとしての役割を果たしていたと考えられます。広場では時に市が開かれていたのかもしれませんが。

そうであれば、水害の恐れがあるような川の近くに大きな集落が営まれたこともうなずけます。トラックのようなものがなく、陸上交通が発達していない当時は舟が重要な交通・輸送手段でした。沖手遺跡から川を下ればすぐに日本海に出ることができますし、益田川やこれと合流していた高津川を遡れば内陸部にアクセスできます。沖手遺跡は水上交通の要衝にあり、港湾集落として栄えたと考えられます。完形品の貿易陶磁とともに墓に葬られたのは、おそらく交易によって多くの富を蓄えた集落の中心人物だったのでしょう。

(島根県埋蔵文化財調査センター調査第2課長)



沖手遺跡空撮写真（南上空から）



発見された多数の柱穴



3間×5間の大型掘立柱建物跡



完形の青磁碗・皿が副葬された墓



青磁碗・皿の出土状態